

9. 黒毛和種繁殖雌牛群に発生したキョウチクトウ混入粗飼料給与によるオレアンドリン中毒事例

玖珠家畜保健衛生所・大分家畜保健衛生所¹⁾

○(病鑑)河野泰三 病鑑 中野雅功¹⁾

【はじめに】

オレアンドリンはキョウチクトウに含まれる配糖体で、その薬理作用は強心、利尿、瀉下などで中毒量を摂取した場合、特異の心臓症状、麻痺、痙攣等を起こす毒性を有する。

管内の肉用牛農家において、キョウチクトウの枯葉の混入した野乾草の給与によるオレアンドリン中毒事例が発生したので、概要を報告する。

【発生状況】

平成23年10月、黒毛和種繁殖雌牛150頭を飼養する農家で、子取り用雌牛4頭が天然孔からの出血、心悸亢進、呼吸速拍、下痢等の臨床症状を呈し急死。診療獣医師が同様の症状を呈する同居牛に対し加療するも回復せず、5日間で子牛1頭を含む16頭が死亡。死亡牛は、県外市街地の除草作業で生じた野乾草を粗飼料として給餌した牛舎に限局して発生。

【材料及び方法】

急死した成牛2頭、子牛を含む同居牛11頭の血液を材料とし、常法に従い病理学的検査、細菌学的検査、血液生化学的検査を実施。給与した野乾草1検体は、目視にて混入する植物の品種同定と、それぞれの含有量を調査。

【成績】

剖検所見：剖検した2頭に共通して心臓、肺、膀胱及び小腸漿膜面に出血痕を認めた。

細菌学的検査：死亡牛2頭の末梢血アスコリ反応は陰性。死亡牛1頭の末梢血中にグラム陽性桿菌を確認。また、1頭の肝臓から*Clostridium Perfringens*を分離。

血液検査：同居牛ではHt値の上昇(46.3±13.1% n=11)、LDH値の上昇(2,862±2,122WL/U n=11)が認められた。

飼料検査：野乾草は刈割草、スキが優先し、1kgあたり44.8gのキョウチクトウの枯葉(乾燥葉)が混在。

【まとめ及び考察】

本事例は発生状況、給与飼料からキョウチクトウ葉の摂取によるオレアンドリン中毒と診断。Namera, Aらによるとキョウチクトウ(乾燥葉)の致死量は50mg/kg(牛,経口)で、体重500kgの牛では25gの摂取で死亡するとの報告がある。今回の発症牛は野乾草を1頭あたり5kg以上給与され、混入したキョウチクトウを致死量の10~20倍摂取した可能性が示唆され、重大事故に繋がったと推察された。

昨今の肉用牛経営は、子牛価格の低迷等厳しい状況下にあり、生産コストの削減を兼ね野草を粗飼料として利用するケースが増加傾向にある。植物には栽培・自生を問わず様々な毒物を有するものが存在し、誤った判断が重大事故を招く可能性を秘めている。本事例を教訓に、生産者に対し飼料の利用について、再度、注意喚起を図りたい。